

今から27年前の31歳のとき、購読していた山梨日日新聞文化欄の縁で、県内の小説同人誌〈群〉(むれ)の同人になった。故・中村鬼十郎(なかむら・きじゅうろう)氏や故・牧宏(まき・ひろし)氏に、年に数回、作品の指導をうけたが、どの書評もきびしく、歯に衣着せぬどころか、そこまで言わなくてもというほど、グザグザ突き刺さる指導内容だった。「こんなものを、いつまでも書いてはだめだ」と、面と向かって何度も言われ、褒められたことは、5年に一度くらいしかない。じっさい、書評が厳しいので辞めてしまった同人が何人かいる。

その指導の中で、今でもこころに残っているのは、「二番目にあるものを書け」という、先生方の言葉だった。一番目に書きたいものには、余計な心情や思い入れがはいりすぎ、独りよがりになりやすい。それをはじめにおいておき、その次に書きたいものを書けばいい、すると、一番目に書きたかったものが、自ずと整理されてくるはずだというのだ。

グラスに泥水をいれて、よくかき混ぜているうちは、たしかに書く材料は無数にあるように見えるが、時間がたち、泥が沈殿するのを待ってこそ書く時期だとも言われた。

きびしい指導をうけたのに、突出した作品も書けないまま、先生方のかつての年齢に達してしまった自分だが、二番目という認識は、正直なところやはり見分けづらい。

独りよがりほど、自分に判断しにくいものはないし、また判断できたとしても、自分の物差しほど、やっかいで当てにならないものはないからだ。

同人誌は、同人の高齢化により数年前に廃刊になり、それ以来自分は、小説の醍醐味は読み手側にこそあると知り、すぐれた作家たちの、おそらく二番目にあつたであろう世界の旅を楽しんでいる。